平林たい子「施療室にて」論

――喪失される子供の視点から

西　荘保

(1)

のちに「女傑」と呼ばれた平林たい子は、昭和二年九月『文芸戦線』に発表された「施療室にて」によって、プロレタリア文学の有力な新人と目され、また、事実これ以後、文戦派を代表する実力作家となっていく。

この昭和二年という年は、平林にとって文学元年と言ってもよい年である。それまで、不安定な私生活の中で、原稿を雑誌社に持ち込む日々をおくっていたが、大正十五年に応募していた『大阪朝日新聞』の懸賞小説に「喪章を売る」(のちに改題「嘲る」昭2・3・30)が入選し、やはり送稿中であった「投げすてよ!」(『解放』昭2・3)が発表された年で、平林は「自信」を持って「施療室にて」を書いたという。[1] そしてこの年、平林は『文芸戦線』の同人、小堀甚二と見合い結婚をし、初めて正式に家庭を持った年でもあった。

「施療室にて」は、満州の慈善病院で「野良犬のように」子供を出産し、その子供を乳児脚気で亡くした後、「旅順監獄分監」に入獄する社会主義者「私」こと北村光代を主人公とする小説で、平林自身の体験をもとに書かれたフィクションである。作品の検討に入る前に、平林の実体験について簡単に述べておこうと思う。

小学校時分から作家志望を抱き、女学校時代に社会主義思想に触れていた平林は、長野県立諏訪高等女学校卒業後、東京で交換手監督見習いをしつつ、作家の道を模索し始める。だが、勤務中に社会主義者の堺利彦に電話したことから一箇月で解雇される。その後、堺に紹介された日独商会（ドイツ書籍店）で働くうちに、アナーキストの山本虎三に出会い、同棲生活に入る。関東大震災時に予防検束された二人は東京退去命令を受け、大正十三年一月、山本の兄を頼って満州大連に渡るが、警察の追及は厳しく、兄夫婦に歓迎されず、馬車鉄道公司社長宅に同居。すでに身重の平林は、鉄道工事に従事する支那人苦力（クーリー）の炊事をし、山本も現場監督として働くが、平林は過労と栄養失調から夜盲症にかかる。大正十三年五月初旬、聖愛病院に施療患者として入院。五月三十一日、ビラ配りのかどで山本、平林ら六名が検挙、平林は不起訴となるが、山本は六月四日、大連分監に入獄。六月七日、平林は女児アケボノを出産するものの、子供は栄養不良のため十七日で死亡。出産後、救世軍婦人ホームで身を癒していた平林は、十月、不敬罪で二年の実刑判決がおりていた山本を満州に残し、作家志望の夢を果たすため帰国する。十九歳になったばかりであった。

「施療室にて」に書かれているのは、山本が捕まった後、施療病院にての平林一人での出産、そして子供の死の体験が中心であるが、当然ながら平林の体験と小説に幾つかの大きな違いがある。まず、山本が捕まったのは、配られたビラの下書きに山本が手を加えていたことが警察に知れたからで、山本自身はビラ配りすらしていなかったのだが、「施療室にて」では、実際に中国人労働者の争議を指導し、テロを企て、社会主義者である「夫」と「私」を含めた五人が投獄されるのである。「夫」の入獄で「行路病者票」を得た「私」は、慈善病院に入院して出産を待っており、出産が済み次第収監されることになっている。従って、その後平林が入獄中の山本を置いて帰国するのに対し、「施療室にて」では出産を終え、子供を亡くした「私」が監獄に向かうところで終わっている。

さて、「施療室にて」より前に執筆されていた「投げすてよ！」という小説もまた、平林のこの大陸体験をもと

に書かれたものである。こちらは、事実にそって書かれている部分も多く、山本虎三おぼしき「小村洋三」と平林おぼしき「光代」が満州に向かう直前から描かれる。社会主義者の弟を厭う兄夫婦は、頼ってきた二人を酷使した上、弟を警察に通報し、「洋三」は不敬罪で投獄。体よく兄夫婦の元を追い出された「光代」は一人、救世軍ホームで出産することになる。そして、最後の三行が、

子供をうむと、妊娠時代の栄養不良が祟って、ひどい脚気になった。子供は、その脚気の乳を呑んで可憐に死んだ。

光代は、遂に、すべてを失い、投げすてて立ち上った。

となり、「洋三」を満州の監獄に残し、帰国する女主人公の姿を暗示しているところで終わっている。同じ体験をもとに描かれた二つの小説、「投げすてよ！」と「施療室にて」。「投げすてよ！」では、およそ十ヶ月にわたった平林の満洲の生活全体が、フィクション化されつつも、ほぼ描かれているのに対し、「施療室にて」では、「投げすてよ！」の最後の三行のうちの二行分、子供を産んで、その子を失う、その部分が小説の中心事件となる。「投げすてよ！」の終わりの二行分を三十何枚の小説にしたのが「施療室にて」であるとでも言おうか。とすれば、「施療室にて」では、主人公たちが運動家であるという設定の他、子供の生死を描くことに創作上の狙いがあったと見ても差し支えなかろう。子供の誕生とその喪失が「私」にどのように作用してくるのか。従来の読みでは、実はこの点への関心が希薄であった。プロレタリア小説「施療室にて」を読むのに、「投げすてよ！」との差異に目配りしつつ、喪失される子供という視点を活かしたいというのが本論の目的である。

(2)

従来、「施療室にて」を読む際、必ずといってもよいほど「目的意識」が問題となってきた。「目的意識」とは、周知のごとく、文戦派の指導的理論者であった青野季吉が書いた論文「自然成長と目的意識」(大15・9『文芸戦線』)による。青野はこの論文で、従来の自然発生的なプロレタリアの文学に対し、これからは、階級闘争を自覚し社会主義的な目的意識をもたなければならないと述べ、初めてマルクス主義文学への理論的方向付けを示した点で、当時のプロレタリア文学に大きな影響を及ぼしたと言われるが、一方で「目的意識」なるものが曖昧なまま提出されており、後日その内実をめぐって混乱が生じた経緯がある。それはそうとして、文戦派で作家として駆け出しであった平林が、この論文に無関心ではいられなかったであろうということも含め、先行論では、しばしば論じられてきた。例えば、駒尺喜美は「夫のテロ、女主人公の投獄、という点での事実以上のデフォルメのされ方が、作品におけるフィクションの問題とは別に、いわゆる『目的意識』的な意識が、そこには何ほどか関係して」いまいかと述べている。[2] あるいは、次のような箇所は「目的意識」的と言ってもよいかと考える。亡くなった子供の「解剖」が始まる頃の「私」の心中描写から結末部分にかけてを引用する。

> 人工栄養の金がなかったために、みすみす脚気の乳をのませて、そのために乳児脚気で死んだと、解剖の結果は証明されるであろう。そしてますます「脚気の乳を警戒せよ、母親が脚気の時には、子供は、乳母または、人工栄養をもって育てざるべからず」ということが医学界に証明されるであろう。しかしながら彼らは、人工栄養の金を持たない種類の人間はどうすべきであるかという結論までを、あの可憐な私の子供の死骸の解剖から導きだすことはできまい。――
>
> 翌日私は検察官に電話をかけてもらって入獄の手続きをすました。夜は植民地には珍しい土砂降りの雨だっ

た、（中略）行く手は李家屯（リーチャントン）の旅順監獄分監だ。郊外の昇り坂へ出ると目つぶしに向ってくる風にさからって俥が動揺した。俥が動くたびにはるかな行く手に見える真赤な灯が幌のセルロイドの窓に点滅した。監獄の表門だ。

この、簡潔でありながら、熱く「私」の闘いの意志を伝える文章には、思わず引きずり込まれるところである。個人的な子供の死の問題が、階級差の問題へと押し上げられ、無産階級者による階級闘争の意志へと踵を接していくこの結末部分は、「目的意識」を意識して構築されたようにも思われる。しかしながら、次のような場面はどうであろうか。話はさかのぼるが、「私」は妊娠脚気を患い、脚気の母親の乳を子供に飲ませることは、場合によれば死を齎すということを知っている。それゆえ、子供のために牛乳を病院側に要求しようとする。だが、その「私」に脳貧血の高価な注射をしたと言って、看護婦を声高にどなりつける院長の姿を見た時、「私」は牛乳を手に入れることを断念する。

――一壜の薬品の値段よりも軽蔑せられた女患者の生命――

私は、子供に濁った乳を飲ませる決心が、ひょうひょうと風のように淋しく心に舞いこんできたのを感じた。

こうして、「私」は自分の脚気の乳を子供に与え、結果として子供は死を迎えてしまうのである。「私」が闘士であるのなら、あるいは結末部分であれだけ闘いの意志を表すのならばなぜここで牛乳獲得の闘争をやらなかったのか。「目的意識」のみを意識するのならば、ここは矛盾するところである。それゆえ早くに壺井繁治などが「『目的意識』の機械的適用」と述べ、「彼女の『肉体主義』とはうらはらな抽象的な『決意』が痩せ細った概念として、不消化のまま、つけくわえられている」と批判する[③]ことにもなるのである。

プロレタリア小説としての完成度よりも、「施療室にて」が評価されるのは、近代の自覚的女性の造形という点においてのようである。戦後すぐに小原元が、「同志」であり、「夫婦」でもあるという二つの関係の中で、「女の

感情と社会意識の相剋のせっぱつまった場で一人の女性に対決をせまる、ぎりぎりの内容を表現」していると論じ、

ふたつのこころをひとつのものとなしえぬ運動自体の歴史的社会的制約、制約をのりこえぬ苦悩を凝視するとき、あたらしい社会的人間としての女性が彫り上げられる。

と述べた[4]評価は否定されることなく今日に至っている。だが管見によると、「私」の中で鬩ぎあっている「夫婦」という関係を見るとき、それは、「妻」であったり、男性と性的に繋がっていたい「女」であったりで、「母」という視点からの「私」への切り込みは希薄である。筆者もまた、階級闘争のための運動を志す、いわゆる全体を意識した社会的レベルか、個人的生活に目を向けるレベルかという「ふたつのこころ」に揺れる「私」の造形というスタンスで、この小説を読みきろうと考えている者ではある。しかしながら、その際のキーワードは、従来なおざりにされていた「母」としての「私」である。

(3)

「妻」であり「母」となる個人的な生活の意識・感情をAと表示し、運動家としての意識・感情をBと表示しながら作品を読んでみる。まず、出産前の「私」の心境からである。

私は監獄を恐れる。嬰児を抱いて監獄生活をする女を描いてみると、内臓が縮むような感じがする。(中略)

いや、しかし、それでいいのだ。私は、額の広い、目の少し吊った女の児をうみたいと思う。よし、日本のボルセヴィチカを監獄で育てよう。(傍線—引用者)

監獄で子供を抱いた母としての自分をイメージする「私」は、Aの次元においては萎縮していながら、逆接語「しかし」(傍線部)でBの意識を高めることで自分をたしなめ、その気分を払拭しようとしている。そして「私」は、

今の事態に至った経緯を思い起こす。だが、ここでも同じくA、Bの意識は逆接語でつなげられていく。

馬車鉄工事の線路を破壊した時の、海にトロッコが転り落ちる凄じい音が、こだまのように耳にいきいきと聞える、すべてが無念だ。

夫と三人の苦力（クーリー）監督が企てたテロのために、四人は監獄にほうりこまれ、争議は根こそぎ負けた。（中略）

私は夫をうらむまいと思う。ああいふ風なテロをすれば、こうなって行くという見透しは、私にはあまりに明白だったのだ。夫と三人の同志とは、私の考を妊娠している女の因循な臆病だと笑った。しかし、結果は私の予想したとおりだ。しかし、そういうところを通り抜けなければ向うへ行けないすべての大勢ならば、やはり、それに従って行かなければならないのが、運動する者の道だ。夫に対する妻の道だ。私は、少しも悔いてはいないのだ。（傍線ー引用者）

無謀なテロに対する「私」の見通しは正しかった。何の成果も挙げず、ただ同志が投獄され、自分も出産が済み次第投獄される。阿部浪子はここで、「うらむまい――逆に言えば、うらんでいるということではないか。」と指摘している。[5] Aのレベルで言えば「うら」むのが自然であろう。だが、ここでやはり「しかし」（傍線部）と続くのである。「少しも悔いていない」というのはそう思おうとする「私」の強気の言葉である。「運動する者の道」と「夫に対する妻の道」とを並列させることで二つの意識を統一させようとはしているが、それは言葉上のことで、「私」は真には納得していない。それゆえ、憲兵隊の廊下で鎖につながれた夫に会った時、夫に「光代、許してくれよ。うまれる子供とお前に、俺は一番すまなく思うよ。俺が悪かった」と謝罪されると、

何が彼にあんな未練の糸につながれた女々しい態度をさせるのであろうか。（中略）

妻の存在が、意志の弱い夫を未練につなぎとめる。未練の夫が投げてくる長い帯の端を、妻は受取らずにはいられないのだ。ああいやだ。いやだ。どこかへ落ちこみそうでたまらない気持ちだ、寄木細工のようにがら

がらに崩れてしまいたい。

と、心を震わさずにはいられなくなるのである。何とか現実の状況を受け入れようとし、何とかBの次元に意識を留めようとし、夫を「うらむまい」としようとする「私」に、夫はAの意識を呼び起こさせようとする。「寄木細工のよう」な意識の「私」は夫を非難せずにはいられない気分になるのである。

やがて陣痛が始まる。「顔の筋肉を鼻のまわりに縮めて腹に力を入れ」る「私」の耳に「トロッコが海へ転り落ちた時の凄じい音」が聞こえてくる。「私」は、痛みに耐えながら、次第に闘争への意志を強くしていく。

私は、愛する夫と引裂かれてこんな植民地の施療病院で誰にも見とられずに野良犬のように子供をうむ自分の不幸を嘆いてはならない。

（中略）私は、未来を信じて生きる。今こんな苦闘の中にいても、私は、この苦闘の中を縫って行く一つの赤い焔を感じる。私は、どこまでもどこまでも、それを見守って闘って行こう。塩からい涙が歪んだ表情の上をとめ処なく流れる。

ここでも、私の意識がBに統一されたとは言い難い。確かに「一つの赤い焔」とは、作品の最後に「私」が向かう監獄の「真赤な灯」と呼応し、ここで「私」は闘いの意志を再確認してはいるのだが、一方でそう駆り立てているのは出産時の激痛であって、その苦闘と「私」の闘いとしての「苦闘」がだぶらされているのである。それゆえ、翌朝、母になった喜びを感じたあと、「私」は夫に悲嘆にくれた手紙を書いてしまうのである。

「……足が立たなくなってしまったのです。便器をいじるのさえ自由でありません。

（中略）それよりも、大変なのは、赤ん坊のおしめを洗う人間のないことです。しかたがありませんから、二階で働いている家政婦に一枚二銭で洗ってもらうよう話をたのみましたが、私の財布の中には今二円七八十銭の金しかありません。いったいどうなって行くんでしょう」

書くまい書くまいと思いながら、自分の感情に押されて、そんなことまで書いてしまった。こんな文句を書く自分に軽蔑を感じながら、（後略）

身二つという状況のもとで、「私」の「ふたつのこころ」の揺れの振幅はむしろ大きくなってはいまいか。

母となった「私」は、かつて工場労働者の女たちが脚気の乳を子供に飲ませて、「あとで幾人か死んでしまった」ことを思い出す。

牛乳だ、一日一合の牛乳がありさえすれば、この問題は解かれるのだ。子供に脚気の乳を呑ましてはならない。

この「乳の問題」が生じてきた時、逆に「私」の中で、初めてAの意識から発して、自然とBの意識に連なっていく経路が開かれる可能性もあったに相違ない。母となった母体は自然と乳をつくりだす。工場で働く無産階級の脚気の母親たちは、お金も手間もかかる人工栄養を求めることができず、母乳を与え、乳児脚気を患った子供たちの幾人かは死んでいったという。家庭内の個人的な問題が社会闘争の問題へと連なっていくはずだった。しかし、「私」はこの後、牛乳を求める闘争へは向かっていかない。さきに引用したように、脳貧血をおこした「私」に高価な注射をした看護婦を声高にどなりつける院長の姿を見て、「私」は「子供に濁った乳を飲ませる決心」をしてしまう。少し長い引用になるが、この「決心」からの「私」の心理をしばらく追おう。

「決心」の翌朝、「恐ろしい勢で乳汁が流れ」だす。

乳を吸われている気持は、軽い睡気に揶揄されているように快い。これが母親の気持のはじまりに違いない。

（中略）

牛乳、牛乳と燻製の鰊のように魅力のない声がどこかで聞えて聞えてしかたがないが、切り捨てることはたやすくできる。脚気の乳であろうと膿であろうと、愛する子供が咽喉を鳴らして飲んでいるではないか。

（中略）

過去と未来とを切り落した、平面な、一枚の紙のような自分を感じる。どうせ、しばしの間の母子だ。私の行く手には監獄が壁のように立塞っている。監獄は少し発育すると子供を引離す。陰惨な監獄生活を子供に知らせてはいけない。また親に罪はあっても子には罪はないゆえ不法拘束になる――そんな理由で子供だけは外へ追い出されるが、こんな個人主義の世の中で母と引きちぎられた子供がどうして自由でありうるか。あの法律は、囚人である母親が、子供という「愛するもの」を、何物をも失っているべき監獄で持っているということに対する拘束をしか意味していないのだ。――ああここまで考えてくると、いつの間にか手に負えないニヒリズムにはまっている自分を発見する。

社会主義者私は、入獄という事実の前に萎縮している。たしかに萎縮している。ああ、そして、また、このあわれむべき自覚が、私を絶望させるのだ。

女よ。未来を信ぜよ。子供への愛が深いならば、深いがゆえに、闘いを誓え。

この「乳の問題」からの一連の引用箇所は、平林が「施療室にて」で子供の存在をどのように描こうとしたのかを考える上で、最も重要なところであろう。時間軸は連続しているものの、登場する「私」はいくつかの異なった位層の「私」である。まず、牛乳を断念した「私」、これには些か虚無的な気分も漂ってはいるのだが、結末との関係から考えると運動家としての、言わば時限爆弾を抱えた「私」という状況ではないだろうか。貧しさゆえにその命を軽蔑させられた無産階級の「私」は、有産階級への敵対心、ひいては階級闘争への手段として、わが子への牛乳獲得を断念した。つまり、わが身の分身――わが子を死にさらすことで、破滅的な状態で敵対する者に向かう覚悟の生成である。暗く「淋し」い覚悟である。そして、これはやはり、作品の最後で炸裂することになる。中山和子は、平林が当時、ロープシンの『蒼ざめたる馬』を座右において執筆に励んだというエピソードから、この「私」

にもテロリズムの心情が反映されたと読んでいる。[6] 正にそういうことでもあろう。

実際の平林の場合はどうだったのか。出産の状況を丁寧に書き込んだ回想等はない。ただ、平林の自伝小説「砂漠の花」（『主婦の友』昭30・1～32・7）を見ると、「金」も「人手」もなかった母子が、「ただ運命を見守っているだけで、せまって来る不幸を押し返す力も、逃げ出す力もあたえられていない、まったくの無抵抗」であったと書かれている。その後、平林の一児は亡くなっており、この場面を、闘争をもって牛乳獲得の話にしていくことは、恐らく「砂漠の花」の状況とあまり大差なかったであろう平林にしてみれば、かえって安易であり、なすすべなく子を失った自分には不当にさえ感じられたのかもしれない。

次に、「乳を吸われ」る「私」の描写の部分である。破滅的な気分を抱きながらも、初めて母となった「私」は、子供に乳を吸われることの心地よさを体験する。この時の「私」は、「母体」という身体的な次元で物事を判断する存在である。

牛乳、牛乳と燻製の鰊のように魅力のない声がどこかで聞えて聞えてしかたがないが、切り捨てることはたやすくできる。

ここで、もちろん作者は、牛乳獲得の闘争を「私」が断念したことに自覚的である。だが、闘争も「淋し」い覚悟も「愛する子供が咽喉を鳴らして飲んでいる」ことの前には影を潜める。このような、あふれる乳を子供が強く吸うという場面は、生後二日では有り得ず、むしろ「子どもへの視点は欠落」しているという指摘もあるが、[7] ここで作者は本当は十七日間生きていた「アケボノ」の面影、その期間にいささかでも自分が体験した優しい気分の記憶、あるいは願望の姿を書き込んだのではないだろうか。この作品全体の中で、最も「私」が安らかでいる箇所である。だが、もちろん、「私」がその次元に長く留まることは許されない。「私」は濁った乳を子供に与えているのである。現実を前に「萎縮」していかずにはいられない。

「過去と未来とを切り落した」、現在しかない「私」。夫らの過去のテロ行為も、「私」の未来の闘争も、子供の未来も考えることができない「私」。「監獄は少し発育すると子供を引き離す。」「こんな個人主義の世の中で母と引きちぎられた子供がどうして自由でありうるか。」――だが、それゆえに子供の命を奪ってもよいということにはなるまい。「社会主義者私」は、牛乳獲得を断念することで、わが闘いの時限爆弾を作動させたものの、現実の重みの前に「萎縮」せざるを得なくなってしまった。やはり、子を思う母の心境、すなわち、個人的な意識のAの次元から社会主義者としての意識のBの次元へと自分を奮い立たせることができない。ゆえに「私」は「絶望」する。子供を犠牲にした上に、社会主義者としても立つことのできない自分に対して。かつて夫を批難したが、「私」も全く変わるところはないのである。

女よ。未来を信ぜよ。子供への愛が深いならば、深いがゆえに、闘いを誓え。

「私」にではなく、「女よ」と呼びかけている。乳を吸われることではじめて知った女、母の感覚。これは決して男女の性愛の存在としての「女」ではない。「妻」でもない。「私」が普遍的な存在として感じた「母」である。母たることの実感から、「私」は自分を普遍化する経路を得たのであろう。子供に濁った乳を飲ませてしまった「私」、子供の未来を考えることのできない「私」、女よ、母よ、子供への愛が深いならば、深いがゆえに、未来の子供たちのために闘いを誓え。Aの次元を否定してBの次元へと向かうのではなく、深い部分で両者を融合させる。Aを内包したBへと、Bの内実を変容させた時、「私」はようやく立つことができたのである。

この地点は、出産前の「私」が夫たちの無謀なテロ行為に対し、逆接語でつなぎながら「それに従って行かなければならないのが、運動する者の道だ。夫に対する妻の道だ。」と半ば強引に、「女の感情」を「社会意識」に沿わせようとしていたのとは別次元である。その考えに心身で納得できていなかったからこそ、「うらむまい」「悔いてはいない」と自分に言い聞かせていたのである。子供を媒介とすることで、「私」の中の個人の感情と社会意識と

はようやく融合し得たのである。それゆえ、この時、夫からの家族を案じる手紙を受け取った「私」の反応は以前と異なってくる。

この手紙も、やはり、夫の監獄でのある生活を私に伝えずにはおかない。私は、囚えられている夫の生活の中で外においてある妻と、生れた子供の事が第一義であることに憤り、またすがりつきたいような堪えがたいなつかしみを感じた。

Aを否定するのではなく、AとBの深い部分での融合を経た「私」は、夫に対して「憤り」だけではなく、「堪えがたいなつかしみ」といった感情をも抱くことになる。

その夕方、赤ん坊に「恐しい下痢」が起こる。その様は「あまりにもまざまざと私の恐れていたことを示してい」た。翌朝、子供は「私」の手元を離れたまま、帰らぬ者となってしまう。見習い看護婦は「にこにこして」それを「私」に伝えに来る。

「ほんとお気の毒、ちょうど四時の時になくなったのよ」

「そうですか」

私は、相手のひそめた声に被せるように、何でもなさそうに、平気な声で答えた。事実、私にはそれ以上の感情は起っていないのだ。

「顔を見たいでしょう、だけど、歩けなくて困ったわね」

「いいえ、見ますまい」

これきり、私は、彼女が微笑を含みながら、何を言っても答えなかった。有料患者の男たちとふざけるのが一日の仕事になっている看護婦たちが、どれほどの手をつくしてくれたか、そんなことは、考えるまでもないことだ。

「私」にとって、子供の死は、「恐れ」ながら予期していたものでもあった。「私」は孤独で耐えるしかない。「感覚は死んでいる。私は不幸であろうか。」と自問する「私」。ここで、「砂漠の花」の同場面を見てみよう。

私は、もう自分が施療患者であることも忘れて、子供のかぼそい命をとり止めるために、幾度でも医者を呼び迎えて強心剤注射をせがんだ。

ここでの「私」は、「施療患者であることも忘れて」行為に出、病院側もある程度応じていたようである。翌朝、子供の死を看護婦が「お気の毒でした。昨晩おそく、とうとう……」と伝えてきたとき、「私」は「深い底知れない悲しみの中で」ただひたすら泣き続ける。

平林は「施療室にて」で、明らかに施療病院側の非人情ぶりを描き、その一方で、「私」から悲しみの生の声を消し去っている。これは、個人的な問題を社会闘争の問題へと立ち上げていくための段階とも考えられるが、破滅的な意志をもって運動に向かうべく子供を死に差し出した母としては、悲しみを表出しないことで、その意図を明確なものとしていっているのだとも推測される。つまり、わが身の罪を引き受ければ、その分、相手側の罪も描くことができるということである。

子供を失った「私」は、心中に闘いの火をともし、監獄に向かうこととなる。この小説の書き出しが、「憲兵隊から病院へ戻ってくると」であった。あたかも、監獄から始まり、監獄に向かうところで終わる小説であった。

(4)

「施療室にて」前後の小説執筆について、平林は次のように回想している[8]。

この創作集（筆者注：『施療室にて』のこと）にのせてある小説は、昭和二年八月にはじめてかいた「施療

室にて」前後の一年間の成果である。「荷車」とか「夜風」のように、当時の目的意識論に影響された痕跡顕著なものもあるが、あらましは自分の芸術上の信念によってかいた。当時から、あまり本流にはなり得ない傾向だったといえよう。（中略）

時勢もそういう時勢であったとはいえ、当時プロレタリヤ文学は、むしろ新興芸術派にくらべると古い自然主義や、体験文学の臭味がぷんぷんとした。私が、それをぬけ出すためその頃耽読したのはロープシンであった。彼はテロリストのサビンコフで、そのテロリズムの経験が、詠嘆的な詩情と一緒に吐露されたのが、「蒼ざめた馬」であり「黒馬を見たり」であった。

小堀甚二の『小説　妖怪を見た』（昭34・7、角川書店）によると、平林は机の上に青野季吉訳のロープシン『蒼ざめたる馬』を置き、「追憶の悲しさにぼろぼろ涙を流」しながら「施療室にて」を執筆していたという。

平林にとって、この小説を書くということは、もう一度子供を亡くす目にあうということであったろう。「投げすてよ！」では及ばなかった子供の死のフィクション化を「施療室にて」で思い至った時、平林はロープシンの『蒼ざめたる馬』から、その死を描く手法や、表現、心情に手掛かりを得たのかもしれない。子供の死に纏わる事実関係の相互性という点で、「投げすてよ！」や「砂漠の花」などと違ってきているのは、「私」の脚気が出産前から自覚されており、「私」はその乳を飲ますことの意味を十分認識していて子供に飲ませたという点である。いわゆる目的意識論に忠実であれば、その際、牛乳獲得の闘争は書き込まれるべきものであった。それがなされなかった理由として、一つには、平林自身、貧苦の中なすすべなく子供を死なしてしまったこと[9]への負い目もあったろう。が、さらに、先に中山和子が指摘したような「テロリズムの心情」の獲得が、子供の死を引き受ける「私」の造形に生かされたからという可能性は十分にある。後に、平林はロープシンの魅力を、「心情が何時も敗北を踏まえ」ているところにあったと述べている[10]。革命運動家であるテロリストの主人公は、「未来のことを考へない、また知り度

くも無い。私は過去を忘れやうとする。私は家もない、名も無い、家族も無い。[11]」という荒廃の中にあって、失敗した仲間の死や、成功と引き換えの仲間の死に遭遇しながら一人生きていく。自らも、監獄で処刑を待つ日々もあった。その時の表現で、「私は何とはなしに死を信ずることが出来なかつた。（中略）私はまた、私が原因で死ぬのだと考へても、歓びも感じなければ静かな誇りも持てなかつた。不思議に無関心であつた。[12]」という件がある。こういったニヒリズムが「施療室にて」の中の、濁った乳を子供に飲ましてしまったあとの「私」の意識、「過去と未来とを切り落した、平面な、一枚の紙のような自分を感じる。」という表現、あるいは、子供を亡くした後の、「事実、私にはそれ以上の感情は起っていないのだ。」といった表現にも通底してはいまいか。

さて、「投げすてよ！」は、出産の顛末を二行で書いた後、「光代は、遂に、すべてを失い、投げすてて立ち上った。」という、強い決意を示す一文で締められる。「施療室にて」では、虚無的な様相を呈しながらも、その立ち上がるさまが、「社会主義者私」として書かれている。

平林がかつて述べた「投げすてよ！」の執筆動機は、まず一つは、執筆当時、内縁関係にあった飯田徳太郎への気兼ねや配慮によるもので、山本虎三とのことを面白く思っていない飯田に「その時の事情を知って貰いたいひたむきな気持でかいた[13]」というもの。もう一つは、自己の生き方を変えたいという切なる希求によるもので、当時、「人の顔を正面から見ることもできないような気持ちで生活していた」自分に「『投げすてよ』という小説をかき、自分の道を自分で拓くことができた。いわば、自分に対する号令である。[14]」と平林は書いている。つまり、「投げすてよ！」の「光代」のように、大陸を去る時に、平林がこのような決意をしたのではない。帰国後、飯田徳太郎との関係の他、性的にアナーキーで、住所も転々とする生活が続いていた、その生活に対しての「号令」である。そして「施療室にて」執筆の頃は全てが一変していた。

多くの評者が述べるよう、『文芸戦線』の同人の小堀甚二と結婚し、社会主義関係の文献を多く読み、心身とも

に安定した時期で、平林自身、オルグ活動も行っていた。これが「施療室にて」の「私」の造形に影響を与えているのは、まず間違いない。大陸で子供を失って、今の自分がいる。もし、子供が幸いにも生き延びることができていたら、平林は大陸で山本の出獄を待ち、そこには違った人生が続いていたであろう。子供の死を今一度引き受け、わが身を奈落の底に沈め、今ある自分を考える。そうして平林が得たものとは、使命ではなかったか。

そういうところを通り抜けなければ向うへ行けないすべての大勢ならば、やはり、それに従って行かなければならないのが、運動する者の道だ。

という言葉は、ここにおいて意味を持ってくる。

前半の、夫へのふがいない気持ち、それが途中「私」にも起こってくる。「私」は子供の犠牲の予感の前に、それを頭で乗り越えるのではなく、身体感覚のレベルから、個人的な感情と社会的な意識を融合させて乗り越えていこうとする。その融合を確固なものとしたのが子供の死であった。「私」の個人の幸不幸に対する感覚は昇華され、個人の感情の次元から、社会全体の次元へと問題を普遍化させたのである。この小説において、子供が死なないという設定はあり得なかったろう。子供の死という一種の敗北をを引き受け、そこから浮かび上がっていく力に「施療室にて」の命を平林は賭けたのではなかったか。

女性にとって最も個人的、かつ打算的ではない、子供という存在を「私」に与え、「私」を迷わせ、迷いから抜け出す道筋をつけたところで「私」から奪い、闘う姿勢を明らかにさせる。平林は、産む性である女性が時局と闘うことの困難さと、その究極の困難を経験した者のみが持つ強さを描こうとしたのであろう。喪失された子供への鎮魂歌として。

注

① 「世に出るまで」（『小説新潮』昭30・9）
② 「施療室にて」（『国文学』昭43・4）
③ 「平林たい子論」（『新日本文学』昭27・3～6）
④ 「平林たい子論」（『批評の情熱』雄山閣、昭23・10、所収）
⑤⑦ 『平林たい子　花に実を』（武蔵野書房、昭61・2）
⑥ 『女性作家評伝シリーズ8　平林たい子』（新典社、平11・3）
⑧ 「『施療室にて』の頃」（『群像』昭42・6）
⑨ 阿部浪子編『人物書誌大系11平林たい子』（日外アソシエーツ、昭60・5）によると、平林の子供の死因は「栄養不良」となっている。本稿での平林の年立ては同書を参照した。阿部は『平林たい子　花に実を』で、平林自身の口から子供の死因は明言されていないと述べている。
⑩ 「ロープシンの小説」（『自由』昭43・3）
⑪⑫ 『蒼ざめたる馬』（青野季吉訳、随筆社、大13・5）
⑬ 「文学的青春伝」（『群像』昭26・10）
⑭ 「その頃のこと」（『文壇出世作全集』中央公論社、昭10・10）

・平林の文章の引用は、『平林たい子全集』（潮出版社）所収のものはそれによる。
・引用部の旧字体は新字体に改めた。一部を残し、旧かなは新かなに改めた。